食い荒らされる鬼灯３

※体験版※

鬼灯は今までの責めと薬の影響で、触手で責められるより、口で舐められるよりも、他人の剛直を接触させられるのが一番感じるようになってしまっている。
今まで散々触手に弄ばれ絶頂を極めまくっていたが、獄卒の剛直で触れられると、それだけで腰がトロけそうな愉悦に襲われる。

引き始めていた絶頂の波が再びざわめき始め、体はその悦楽を期待して再び燃え上がろうとする。

「ふあ・・・・ぁ・・・」

喜悦の吐息を漏らす鬼灯からは、むせ返るような色香が放たれていた。

「鬼灯様、動きますよ・・・」

クチュリ・・・と卑猥な音が響き、獄卒が鬼灯の会陰部に剛直を重ね合わせる。
予想通り、いや、予想以上の快感が鬼灯の下半身を走り、腰をたちまちトロけさせてゆく。獄卒が体を進め、ほんの一擦りしただけで鬼灯は体を硬く緊張させ、ヒクヒクと腰を妖しげに痙攣させた。

「鬼灯様がイキやすいように、他の場所も触ってあげますね・・・」

「モノの先っぽとか、イカない程度に刺激しろよ。すると、潮を吹くかもしれないからな」

獄卒達が鬼灯の体を一斉に攻め始めた。

「いっ・・・うっ！やめっ・・・！」

拒絶の言葉を吐くものの、剛直を会陰部に強く押し当てられて、また絶頂のような強い快感を感じてしまう。下半身だけにとどまっていた快感の波は今回上半身にも広がり、それぞれの性感帯を震わせてゆく。

「あっ・・・ぁぁあぁ・・・っ！」

耐え切れず鬼灯が喜悦の声を上げると、ビクビクと痙攣している体を獄卒たちは遠慮なく責め始める。上半身の着物を肩が顕になるまではだけさせられると、快感が走っている最中の胸の突起を弾かれ、耳朶を舐められ、首に舌を這わせられ、鬼灯はますます体の痙攣を強めた。

「はあっ！ぁぁあぁ！」

自身を柔らかく握り込まれ、そのままゆるりと撫で回される。決して激しい愛撫ではないが、体中に快感が走りまくっている鬼灯にとっては腰がトロけそうな快感だった。

会陰部を責めている獄卒が、さらに体を密着させて強く押し付けてる。またもや快感の大波が押し寄せ、鬼灯の手足が激しく暴れまわる。

「あっ、あっ、あっ、あああああ！」

鬼灯の体が一瞬硬直し、すぐにグタリと弛緩する。

しかし、この刺激での責めは一度絶頂を迎えても、刺激され続ける限り、体力の持つ分、連続して絶頂し続けるのである。

「はあっ！あっ！ぁぁぁああ！」

獄卒が自分も気持ちよくなろうと、さらに鬼灯の体へ強く剛直を食い込ませる。その刺激だけで、鬼灯は再び絶頂を迎える。しかも、悶絶せずにはいれない激しい快感である。

鬼灯が達するのを見計らって、獄卒たちが体中のあちこちにいたずらを仕掛けてくるが、ただでさえ不安を覚えるほどの激しい快感にさらされている中、その刺激はいたずらどころの生やさしい感覚ではなかった。

「んぐっ・・・・！は、あっ！体に・・・触ら・・・ないでっ・・・・！」

絶頂に打たれながら、必死に声を絞り出して懇願するが、当然獄卒たちは聞き入れない。

「鬼灯様、体中ビクビクしてますよ」

「エロいなあ・・・」

絶頂の波が支配している腰や臀部を撫でられ、ビクリと鬼灯の体が弓なりに跳ね上がる。

「んんっ・・・！」

もう、ゾクゾクどころか、グワンと殴られたような暴虐な快感が鬼灯の中で巻き起こる。この快感の前では、羞恥も矜持も、なにもかも吹き飛んでしまう。

「あああ！ああ！あっ！あああああ！！」

自身の先端を強く擦られ、身が擦り切れそうな快感が押し寄せる。胸の突起を責めていた獄卒が突起に舌を這わせ、蛇のようにチロチロと素早く舌を動かして刺激してきた。

「あぁあ！だめ、そ、そんな・・・の・・・」

会陰部の絶頂だけで体をのたうちまわらせている上、性感帯を責められてさらに快楽の上乗せをされ、鬼灯はただただ激しく身悶えた。
あまりにも簡単に絶頂を迎えている鬼灯が信じられず、獄卒たちはいつもどおりの激しく甘やかな責めを繰り返してゆく。
会陰部を擦り付けている獄卒は、絶頂が近いのかどんどん腰を使う速度を早めてゆく。

「あっ！あっ！あああ！やめっ！もう・・・、ああ、あぁぁ、あっ、あっ！」

次々と絶頂を迎え、快感の深さに悶絶する鬼灯。

しなやかな肢体が壊れたように激しく痙攣すると、今度は自身の先端から勢いよく透明の液体を噴出させた。

「ああ・・・あっ・・・あっ・・・ぁぁ・・・っ！」

ベタベタするが、精液のように白くない。
鬼灯の様子をみると、イキきったかのように四肢を投げ出し、口をだらしなく半開きに開けたまま熱い吐息を断続的に吐き出している。

「これって、もしかして潮吹きってやつ？」

「すげえ！俺、男の潮吹きなんて初めて見たよ」

「射精とどっちが気持ちいいのかなー」

鬼灯の体の反応に興奮を隠しきれない獄卒たちの間で、鬼灯は尚も絶頂を与えられ続けている。

（こ、この快感すごいっ・・・！もう、耐え切れませんっ・・・！）

剛直が会陰を押し擦るだけで、たちまち短い絶頂に上り詰めてゆく。すぐに高みからは放り出されるが獄卒の腰の動きが早いので、瞬く間に再び高みへ舞い上げられてゆく。

「ああっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっーーーーーーーーーーーーー！！」

もう喘ぎ声をあげる隙もない。体中のあちこちで快感が弾け、絶頂が襲い来る。胸の突起を指で上下に素早く擦られ、それだけで全身に甘い痺れがジー・・ンと駆け巡る。

「硬くなってないのに、先っぽから汁がいっぱい出てますよ」

「すげえな、潮吹きって・・・」

先から溢れ出る透明の液体を手につけ、力のない鬼灯にまんべんなく塗りつけると、反応させようと手のひらで包んで上下に擦り上げる。

「んあっ！あっ！あああああ！」

体中に快感を感じている状態で自身を弄ばれるのは快感を通り越して苦しくさえなってくる。最も一番快感を感じている部位は責め続けられている会陰部で、責め続ける獄卒はなかなか絶頂に達しないのか、いつ終わるともしれず激しくこすり立ててくる。

「んんあぁっ・・・！あっ！はっ、はっ、はっ、はっ・・・」

上半身を幾本もの手のひらが這い回る。着物をすっかりはだけさせ、滑らかな鬼灯の肌の感触を楽しむように、スルスルと無骨な手のひらが白い皮膚の上を這い回る。
いつもなら嫌悪しか感じない同性の性的な触り方に、今は陶酔したような快感がこみ上げてくる。

（も、もう、私の体っ・・・）

体中に激しい快感が走り続け、矜持も理性も働かない。自分の体が一体どうなっているのか、どうなってしまったのかすらわからない。
耳も首筋も胸の突起も脇腹も、全て只ならぬほど気持ちいい。

「鬼灯様、めちゃくちゃ気持ちよさそうですね・・・」

「やらしい顔してますよ、すげえ・・・」

獄卒たちが生唾を飲む。今の鬼灯なら、誰が抱いても可憐に悶え喘ぐだろう。誰もが早く鬼灯を独り占めしてたくてウズウズしていた。

「ああっ！あっ！あっ！あっ！あっ！」

鬼灯がこれまでにない切羽詰った声で鳴き始める。
下半身を責める獄卒の腰の動きが早くなり、弄ばれている自身も硬さを取り戻し、一見しただけで絶頂寸前だとわかる。
与え続けられる快感が強烈すぎて、鬼灯は身も世もなく乱れ喘いでいた。

「あああ！んぐっ・・・！はあ、あぁあぁあああ！ああっ！やっ・・・！はあ、はあ、はっ！ぐ・・・うぅぅ！んんんっ！――――――――っ！！！」

鬼灯の体がいきなり強張り、見る間に自身から確かな白濁が放たれてゆく。会陰を責めていた獄卒もようやく絶頂を迎え、鬼灯の下半身に精液をぶちまける。

「・・・・っ！っ！・・・・・・っ・・・」

口を大きく開けながら、声も出せず鬼灯の体が何度も大きく跳ね上がる。誰が見ても、鬼灯が激しい絶頂の頂きに突き上げられているのだとわかる、激しい痴態だった。

鬼灯の四肢がカクンと力を失うが、なおも体のあちこちでヒクヒクと痙攣が止まっていない。
体がようやく触手ベッドの上に降ろされたが、まだ絶頂の高みから完全に下りきっていないらしく、鬼灯の表情は絶頂を堪えるように歪められたままである。

「凄いイキっぷりでしたね、鬼灯様」

言いながら胸の突起を指で弾くと、未だにビクンと体が小さく跳ね上がる。絶頂してすぐに終わる射精の快感ではなく、いつまでも余韻の残る緩やかな絶頂の終わりに、鬼灯の体は未だに翻弄されていた。

再び体を乱された鬼灯の体液を貪るべく、ベッドから幾本もの触手が体に群がり、白い肌を流れる汗や白濁の跡を舐め取ってゆく。

「ん・・・ふっ・・・・はぁ・・・・ああ・・・」

触手の刺激が心地よいらしく、感極まった声を上げる鬼灯。高みから降りている途中の鬼灯の体には、丁度良い後戯のように感じるらしく、妖しく身をくねらせて触手の愛撫を受け入れる。

部下である獄卒たちの見ている前で、有り得ない艶姿を見せる上司に、周りの視線が絡みつくように鬼灯を捉え続ける。

誰もが鬼灯の体に飛びかかりたくて仕方がない雰囲気が漂うが、当の本人は全く気づくことなく触手の愛撫を受け入れ続ける。

「も、もうたまりません！俺！」

「俺もやりたいです！」

誰が止める間もなく、獄卒たちが鬼灯の体に覆いかぶさり、自らの欲をぶつけてゆく。

「んんっ！んぐっ！うぶっ・・・」

口腔に剛直を突き入れられ、いくつもの力強い手によってあちこちを掴まれ、後ろにも剛直を突き立てられる。ようやく絶頂を終えたばかりの鬼灯だったが、再び加虐の渦に巻き込まれ激しい快楽へと浸される。
体中が快感で痺れきり、何をされても無抵抗な鬼灯に、獄卒たちはますますつけあがり、激しい奉仕を強要しはじめる。
着物を引き剥がされ、晒された素肌に不浄の肉棒を押し付けられ、握らされ、擦られ、抉られてゆく。
早々と快楽を極めた獄卒が鬼灯の体に白濁をふりかけてゆく。
鬼灯は意識もはっきりしない状態で、ひたすら快感に汚され続けた。

※中略※

「まあしょうがねえよ、あの人数で鬼灯様責めても、むさ苦しい男ですし詰め状態になって、ろくに触らせてももらえねえかもしれねえしな」

四人取り残された獄卒たちは、それぞれに自分たちで妥協案を出し、とりあえず鬼灯へ近づいて行った。

「あっ、ぁ、ぁ、あっ！ぁぁ！！あ・・・はぁあああ！」

淫靡極まる格好でいやらしい触手に体中を責められ、鬼灯が喜悦の声をあげる。
今、鬼灯の体には獄卒たちの想像を絶する快感が渦巻いている。しかし、そんなことは獄卒たちには関係はない。
自分の欲を満たすためだけに、鬼灯の体へと手を伸ばした。

「俺、口いただくぜ」

「じゃ、俺は素股な」

「マジかよ？じゃ、どこで俺らは抜けばいいんだよ」

「そこらへんでやったら？」

冗談の色を含んだ仲間の言葉にカッと頭に血が上り、つい怒鳴り声を上げる。

「ふざけんじゃねえよ！じゃあ、手で抜いてもらう！」

「俺、足の裏・・・」

「ちょっとマニアックじゃね？」

四人の獄卒たちはそれぞれの持ち場につき、自身を鬼灯にあてがい、蠢きはじめた。

「うわ、鬼灯様・・・いきなりすげえ舌づかい・・・」

舌も性感帯にされている鬼灯には、擦りつける部分ができて気持ちが良いというだけだが、それが結果的に獄卒たちを楽しませる結果となっている。

「ほら、俺たちと違って事務仕事ばっかしてるスベスベの手で、しっかりシゴいてくださいよ」

鬼灯に自身を握らせ、その上に自分の手のひらを重ねて上下に動かす。

「鬼灯様の足裏、綺麗なんだよな・・・」

草履を脱いで正座し、机上で事務仕事をしいてるその後ろ姿に欲を感じていた獄卒は、周囲に引かれながらも片足を持ち上げ、自身を足裏にあてがう。

「触手が張り付いてるから、正確には素股・・・じゃねえかな？」

剛直を取り出した獄卒は、鬼灯自身に自分を重ねて擦りあわせようと試みているが、鬼灯自身は根元からホースのような触手に覆われている。

「これ、ひっぱってやれ・・・・」

グイ、と乱暴に触手を引くと、鬼灯が腰を突き上げて苦悶の声をあげた。

「んんんんっ！！んうぅ！うぶっ・・・・んんっ！！」

あまりの激しい反応に、獄卒は加虐心を掻き立てられ、わざと一度で抜けないようにクイクイと少しずつ引っ張って触手をはぎ取ろうとする。

「んんんーっ！！んっんっんっ！んんん！んぐっ！うぅーっ！！！」

チュポっと水面に水滴が落ちるに似たような音がして、鬼灯自身は触手から解放された。
獄卒は試しに指一本をホース触手に突っ込んでみたが、中はキュウキュウとしめつけてキツく、さらに硬い突起がいくつも生え揃っている。
これで指よりも太い器官をくわえ込み、突起で掴んで離さなかったものを、無理矢理引き抜いたのだ。鬼灯の悶絶した理由が簡単に解ける。

先ほどの刺激でまた射精してしまったらしい、力を失った鬼灯自身を今度こそ自分の剛直に重ね、そのまま前後に腰を動かして擦りつけてゆく。

「ん、ん、んん、んっ、んんんっ」

鬼灯自身は瞬く間に硬さを取り戻し、すぐに先走りを吐き出して摩擦の動きを潤滑にしてゆく。

「ほんと、感じやすい体になっちゃって・・・」

口と素股を奉仕させていた獄卒たちは、瞬く間に吐精してしまった。

口の中に広がったドロリとした粘液は、鬼灯の舌を熱く痺れさせ、快感の疼きを浄化してゆく。無意識の飲み込んでしまうと、染み渡るような悦楽が全身に広がり広がり、口を犯されただけだというのに、鬼灯は背中をブルブルと震わせ、信じられないことに後ろで絶頂してしまった。

「あぁっ・・・・・・あ・・・・・・っ」

自分でもなにが起こったのか把握できず、戸惑いながらも絶頂の余韻に体を痙攣させる。

「あれ？鬼灯様、もしかして俺の飲み込んじゃった？」

鬼灯の口から萎えた自身を遠ざけ、無理矢理鬼灯の口を開けさせると、口腔を覗き込んで残滓が残っていないのを確かめる。

「嬉しいなあ～、もっとたくさん飲ませてあげたくなるじゃないですか・・・」

喜色を浮かべる獄卒は、そのまま調子に乗って鬼灯の口腔に指を突き込み、舌を挟んだり擦ったりして遊んでいる。

（舌・・・感じてしまう・・・・）

獄卒の指から逃げるように動かすつもりが、舌の擦れるあまりの快感に指を愛おしげに舐め回してしまう。

「うわ、鬼灯様、すげえ色っぽい・・・」

長い睫毛を伏せ、いつもはつり上がっている眉を垂れさせ、熱い吐息を吐きながら小さい口で無骨な男の指をしゃぶる姿は、もう一度獄卒に性のたぎりを呼び起こすのに十分なほど刺激的だった。

直後に素股で絶頂を迎えた獄卒が、鬼灯自身に精液をふりかけ一方的に己の欲を満たす。

（ひうっ！あぁ、熱っ、熱い！！）

最も敏感な器官に精液をかけられた鬼灯自身は、熱く煮えわたる感覚に支配され、強すぎる熱に連続して射精してしまっていた。

「うぅぅつ・・・・・・・・・・・！！」

ジクジクと膿むような灼熱の悦楽に、まともに声すらあげられない。

手と足裏を使っていた獄卒はまだ少し時間がかかる様子で、すぐに口と素股に場所を移動させる。

「早く出せって・・・」

「焦らせるなよ、バカ」

獄卒同士で軽くモメながら、鬼灯自身に剛直を重ね合わせ、腰を使って上下に激しく動かす。

「あぁっ！あっ、ぁあ、あっ、あっ・・・・・はぁ、んふぅっ！・・・・」

再び与えられた快感に、鬼灯がすすり泣くような喘ぎ声を上げる。

「あっ、すげえ良い声・・・」

たちまち調子を取り戻した獄卒は鬼灯の腰をかき抱き、一層激しく腰を動かす。

「鬼灯様、もう一回気持ちいいのを咥えられますよ？」

喘ぐ鬼灯の口に指を差し入れ、舌を挟んで口を開けさせると、獄卒の剛直を挿し込ませる。

「んっ、んぶっ、んうぅ、んっ・・・んっ、んっ！」

舌に熱い快感が走り、再び剛直へ一心不乱に舌を擦りつけて快感を貪ってしまう。

下半身にもゾクゾクと快楽が沁み渡り、我慢し難い激しい快感に両足をバタつかせる。

後ろを突き続ける触手が上下しながら回転運動を繰り返し、さらに鬼灯を追い詰める。

「はっ、はっ、ほ、鬼灯様・・・・っ」

滑らかな黒髪が首筋に張り付いている姿が美しく、興奮した獄卒が胸の突起へ舌を這わせる。

「んっ・・・・！！んふぅっ、んん・・・・っ！」

何重にも快感を与えられ、あまりの刺激に四肢をめちゃくちゃに振り回して暴れたいほどだったが、腕は触手に、足は獄卒に抑えられてそれも許されない。

「ん、ん、んっ、んんんんっっ！！」

一気に快感がこみ上げて、鬼灯は自身からあえなく白濁をこぼしてしまう。

「ははっ、鬼灯様、またイったよ」

素股を繰り返す獄卒の剛直はまだ射精にいたらないらしく、変わらない調子で萎えた鬼灯自身を擦り続ける。

「んふっ・・・・ふぅ、ふーっ・・・・・、ふーっ・・・」

射精の快感に浸り、恍惚の息を吐き、快楽の余韻を受け流そうと努める鬼灯。しかし、口を犯す抽出は止まらず、自身を刺激する動きも止まらない。後ろも触手で激しく縦横無尽にめちゃくちゃに突かれまくって、再び浅ましい熱が鬼灯の体を欲情に染め上げてゆく。

「はぁ、はぁ、鬼灯様、また固くなってきた・・・」

笑いながら鬼灯の胸を舐めながら、射精が近いらしく、獄卒は一段と腰の動きをはやめる。

「鬼灯様、こっちも・・・・」

鬼灯の後頭部を掴み、激しく上下に動かして剛直への奉仕を激しくさせる。喉の入口まで侵食されて、苦しそうに呻く鬼灯の声が聞こえたが、獄卒は構わず深い抽出を続けた。

「うぶっ・・・！ぐっ！んんんぅ、うぐっ・・・・んっ！んんん！！」

これだけひどい扱いを受けているというのに、鬼灯の口腔は最も感じる器官に触れられる事で歓喜にわいた。息苦しさよりも、舌で剛直を舐める快感が勝ってしまう。

「あっ、もう出ます！鬼灯様！」

口を犯していた獄卒がそう宣言すると、そのまま鬼灯の口の中へ白い精を放った。

「んんっ！んんぐぅぅっっ！！」

喉の奥に放出され、何の抵抗もなくゴクゴクと精液を飲み込んでしまう。体の中から灼かれる快感が広がり、今までになかった感覚に戸惑いを覚えながら、素直に快楽として受け止めてしまう。

「んぶっ・・・ぷはっ！はぁ、あ、ぁぁ・・・っあ、あぁ、あっ、ああぅうっ！んんっ、んはぁああ！」

口の快感は去っても、下半身を襲う快感は治まらない。

触手の動きもどんどん激しくなり、腰を動かす獄卒の動きもますます早くなり、先ほど射精したばかりの鬼灯自身は再び絶頂寸前にまで追い込まれていた。

「んっ、いくっ・・・・」

獄卒が呻くと、剛直の先端から大量の白濁を吐き出した。全て鬼灯の両足の中心に掛け続け、射精の快感に息をもらす。

「あぁあっ・・・・!!ああっ!はっ・・・・・・ぁぁぁぁああ!!」

白い肢体が反り返り、体の線に沿って絶妙に美しい影が落ちる。自身に快感源を振りかけられ、灼けつくような熱さと共に、鬼灯も絶頂を迎えた。

「くぁっ・・・・あっ、はぁ・・あっ、あっ、ぁぁぁぁぁあっ!!」

射精を迎えた直後の少しズレたタイミングで、後ろの触手が鬼灯の性感帯を一気に抉った。快感が体を突き抜け、鬼灯の体は再び硬直し、出し終わりかけていた精液が再び勢いよく放出される。

「はうぅぅんっ・・・・・・！・・・・・あ、ぁぁ・・・・・」

鬼灯の体から一気に力が抜け、人形のように力なく四肢を投げ出した。

荒い息だけをついて、絶頂の余韻に浸る鬼灯の美しさに、獄卒たちは釘付けになってしまった。

「鬼灯様、超キレイ・・・・」

白濁に濡れまくった両足の中心や、荒い息でゆっくり上下する固くなった胸、絶頂の表情のまま目をつぶって荒い息を繰り返す美貌、その全てを携帯のカメラで撮影し、一応の満足を得た。

なんとか１０分以内に一時的な欲を満たした獄卒たちは、喘ぐ鬼灯を再び触手の池深くへ沈めてゆく。

好物の精液を貪らんと、何本もの触手が鬼灯の両足の間に伸びる。

「あぁぁ！あっ・・・・ぁぁ、あっ・・・・」

激しい触手の動きに、再び強制的に性感を高められ、発情を強要される。

「可愛いものですね、鬼灯様」

「また俺たちが来るまで、触手と遊んでおいてくださいね」

「次こそ、めちゃくちゃに突っ込んであげますから・・・」

かなり後ろ髪を引かれる思いで、未練を引きずりながら獄卒たちはその場を後にする。

役割が再び回ってきたと狂喜するように、触手たちが鬼灯の体に群がってゆく。

※中略※

その異様な物体に、鬼灯は寒気を覚えた。
触手の先端からヌルヌルとした粘液がこぼれ落ち、鬼灯の足首に落ちる。人肌より少し熱い程度の淫液が、鬼灯の皮膚に染み渡る。

「なっ、なんですか！これは！」

「うーん、歯車拷問ってところかな？」

おぞましい物体の隣で、首を傾けて無邪気に言う。中身は獄卒だが、見た目は桃源郷のあの男。
鬼灯の足が大きく広げられ、腰も持ち上げられ、下半身が宙吊りの状態になってしまう。

「や、やめ、やめなさい！下ろせ！」

中身は違うと分かっていても、桃源郷の薬屋の姿をしている男に見られていると思うと、一気に羞恥がわきあがる。

これから始まる淫拷問は、間違いなく鬼灯を狂わせてしまうだろう。しかも、このような無様な格好で、羞恥の限りを尽くされるのだ。

（嫌だ、嫌だ・・・！こんなの絶対に見られたくない！）

鬼灯の知る端正な顔立ちをした赤い隈取の男が、歯車触手を鬼灯に向かって転がせる。

「んぐうぅぅっ！」

歯車は転がり、グチュッと粘着質な音を立て、鬼灯の両足の間を直撃する。
痛みはなかったが、ヌルヌルとした不快感と、歯車触手の質量が衝撃となって腰をてきめんに痺れさせた。

「あははっ、ちゃんと食い込んだみたいだね」

歯車の触手は熱く、ヌルヌルとした肉厚の感触が蠢き、強く押し付けられているだけで鬼灯の腰に愉悦を与え続ける。

「はあっ、はあ、はあ、ぁぁぁああ・・・」

鬼灯の両足の間で、押さえつけられている触手がヌクヌクと蠢く。犬の舌のような触手は会陰を舐め回し、たっぷりと粘液をまとった触手が後ろをヌメヌメとくすぐる。柔らかく太い触手がビチビチと魚のように暴れ、鬼灯自身を刺激し続けた。

「ふうっ・・・!んっ!んぁぁ・・・っ!」

(だめだっ・・・もう、食い込まされているだけでこんなに感じてる・・・)

すでに快楽で下半身を灼かれつつある鬼灯は、早くも意識を喜悦の沼に浸らせようとしていた。

「あれ?もう気持ちよくてたまらないんですか?」

「・・・!そんなわけないでしょう・・・!」

「じゃ、もっと食い込ませよっと」

鬼灯の反抗的な態度に、面白半分でさらに歯車を押し付ける。

「んううぅーーーーーーっ！！」

ビクンと鬼灯の腰が跳ね上がり、電撃のように快感が走る。

「ほらほら、これはどうです？」

獄卒は歯車を鬼灯の体から離した。一時快感から開放され、鬼灯が安堵の吐息をつくが、獄卒はすぐに勢いをつけて鬼灯の中心へ歯車を叩きつけた。

「あああああっ！」

ドブチュッと柔らかい物同士がぶつかる音が響き、鬼灯の腰に快感の衝撃が走る。たったこれだけの刺激で、鬼灯は絶頂近くまで体を高められてしまった。

「ほら、ほら、ほら・・・・」

獄卒は何度も歯車を離し、ぶつけ、離し、ぶつけるという行為を繰り返す。歯車の先が中心に食い込むたび、鬼灯の体は面白いように跳ね上がった。

「あっ！あっ！あっ！んんんっ！はあっ！やめっ、やめっ・・・！」

口から淫靡な涎を垂らしながら、快感に痺れきった声で獄卒の行動を止めようとするが、制止する声には全く威厳も力もこもっていない。
聞きようによっては、「もっと」とねだるようにさえ聞こえるほど、鬼灯の声は官能に彩られていた。

（イク、イってしまう！こ、こんな責めでっ・・・！）

ガツガツとぶつける間隔が短くなり、鬼灯に連続して肉塊の衝撃を叩き込み続ける獄卒。
グシュッグシュッと熱く柔らかい触手が性感帯を絶えず刺激し、鬼灯の腰が切なく燃え上がりつづけ、ついに最高潮に達した。

「あああっ！イク、イってしまう、嫌だっ、いやっ・・・！！」

しかし鬼灯の心とは裏腹に、強めにぶつけられた瞬間、体はいとも簡単に絶頂を迎えてしまった。

腰全体に灼けるような熱さがジワリと広がり、暴れ回らずにいられない程の強い快感に襲われる。

「あっ！あっ！あああああああああああああ！！」

鬼灯自身から勢いよく潮が飛び出し、絶頂の証を晒してしまう。

「ほらほら、もう一回もう一回・・・」

絶頂を確認しても、赤い隈取の男は歯車をぶつけることをやめず、むしろ動きを激しくして、さらに鬼灯を責め立てる。

イったばかりで敏感になっている自身を抉られ、押さえつけられるだけで射精とは違う絶頂を続ける会陰も容赦なく責められ、会陰での絶頂の快感の中、さらに射精の絶頂を強要される。

「んぐうぅっ！ああ、ぁぁぁあぁ！」

下半身が硬直し、自身から白濁とは違う透明の液体がこぼれ落ちる。すぐに訪れた絶頂は、一回目ほどの勢いはなかったが、快感は二度目の方が強く、鬼灯の理性を押し流した。

それを見て獄卒は満足げに笑い、体の緊張を解いてグタリとなった鬼灯の中心に歯車を食い込ませると、そのまま手を離して責めを止めた。

「はっ・・・はぁ・・・はぁ、はぁぁぁ・・・・んっ・・・あ・・・」

二度続けて絶頂したばかりの体に、再びジクジクと疼く刺激を与えらえ、鬼灯の敏感な体は従順に快感を受け止めてしまう。

「ふふ、鬼灯、凄くいやらしい格好だよ・・・」

グリグリと鬼灯の中心に歯車を食い込ませ、快楽に悶える鬼灯を満足そうにながめる。

「僕の名前を言ってくれたら、もっと気持ちよくしてあげるんだけどな・・・」

「・・・・名前などっ・・・・」

「まあ、言わなくても気持ちよくしちゃうんだけどね」

獄卒は軽く笑い、いよいよ歯車に手をかけ、時計回りに、まさに秒針のようにゆっくりと回転させる。

「ああ！あぁあああああ！あぐっ！ああっ！あっ！あああ！」

続きは製品版でお楽しみください